

放送人の会 会報

創立総会

盛大に開かる

去る十二月二日、「放送人の会」の創立総会が東京の千代田放送会館で開かれた。この日、生憎の雨天にもかかわらず、九州、中国、京阪などから駆けつけた人たちを含めて百二十名の会員が参加、二年近い準備期間を経てようやく開催にこぎつけた創立総会であった。

会員の相川浩さんの司会で、まず野崎茂発足準備室長から会の発足までの経緯が説明され、引きつづき川口幹夫氏を満場一致で会長に選出した。

川口幹夫会長挨拶

自覚と自律の自由人へ

「放送人の会」会長を引受けるに際し、一組織ではなくて放送全体の運命に係って行くから前よりも任務は非常に重い、と自覚しています。今はスタート、ロケットでいえば第一段ロケットだ。まず地球の引力から何とか外れなければならないので大変なエネルギーを要する。私は何しろ昭和二十五年ですからね、放送を始めたのは、二八年のテレビが始まる時は一フロアディレクターでスタジオを這い回った経験があり、そうしたキャリアの長さから多少のことは知っているから、それを私のエネルギーにして、専らロケットのエンジンの役割をし、本体はむしろ若い人、特に今現役で色んな仕事をやってる方にやって貰いたい。前から、色んなものの垣根を無くさなければいけない、制作に当っている個々が自由に発想をしよう、意見をいって自由に自分の行く方向を決めていく、というのが一番理想的な形だと

思っていたから、そうする為に敢えてロケットのエンジンの役割をするのが今一番いいんじゃないかと、引き受けた訳です。NHK会長に就任してから間もなく、例のムスタンの事件、やらせ事件というのが起こり、その後もオームの事件とか或いは椿さんの発言事件とか次々あり、私も何回か国会に呼ばれた。その場合も私が始終一貫して言ったのは「問題を詰めて行く」と、放送を創っている者・報道を担当している者が、どのようない形で自らを律し、自立しながら自分の仕事を果たして行くのかという、個人の問題に帰着致します。組織の問題とか機構の問題とか方法の問題とか考へないで、むしろ個人に還して行くということを探らなければならぬと思います」と。未だにその考え方は変わっておりません。で、現在NHK民放そして製作会社で、非常に多くの人たちが働いているけれども、その

セクションで働いている一人一人が自覚自立し自らを律することが出来るように、放送を創っている側人間が集まって、何かの折りに、どのようにサジェスチョンしようという風にアドバイスすることが出来るか、「放送人の会」は、それを話し合うという場にした。

勿論放送人というのは色んなタイプが居り、色んな形の仕事の仕方があり、従って個人はみんな別々な考えを持ち別々な方針を持ち、別々な方法論を持っている、これは当然です。それをひとつの方向にまとめて行くと、思わない方がいい。決して、打って一丸となつて何かに当たるとかいうことを考えない。一人一人が一人一人の力を最大限に発揮する。で、まとめ役はただそれをまとめるだけというやり方を取るべきで、それが巧く行けば、今後、これまで世上を賑わしたような放送に関するトラブル・問題は相当減るんじゃないか。個人が何を考えどういう風にするかというのを考えれば、そのこと自体がいい放送を作り出す力になるに決まっている。そういう個人の力が花のように広がってきて百花繚乱という形になるのが、より良い放送の在り方ではないか。この「放送人の会」もできたらしういうものを助けるための組織にしたい。

いわゆる組織力という風なものには殆ど無くても良い。自ら圧力団体にならうなんて冗談じゃない。私は毫もそういうことを思いません。放送に対する責任と自覚を持って番組を作る・報道に当たる、そういう一人一人の形を作ることに、これだけは何かでもやり遂げたい。

丁度今、私は行政改革会議の委員で明後日最終答申を出すけれども、なぜ改革しなければならぬか、改革するとはどんな意味を持つているのか、そこをきちんと捕らまえ直して色んな提案をしよう、と委員になった。我々が今当面する問題は、日本の放送をどうするか。テレビが始まってからの長い時間の間に、自然に日本(行政政治経済)が陥っているような幾つかの落とし穴に、我々自体がはまっています。んじゃないか? それならば、日本の放送を少しでも良くするために、どうすればよいか。

そういう必要性が当然起ってくる訳ですから、組織として旗を高く掲げながらアッピールするよりも、一人一人がそのことを自覚することによって、結果として日本の放送がぐっと良くなった、この頃はいい放送をするなど皆が思ってくれる、そういう風になることを密かに希っている。そして、そんな意味で「放送人の会」がお役に立てればこんな嬉しいことはない。幸いに発起人会段階で大体皆さんがそういう方向に行こう・行かねばならぬと思っ下さっているようなので安心して、なるべく大勢の方が色んな形で、放送という素晴らしい存在をやって

いてある種の興奮を感じる媒体(折角我々の前にあるこの素晴らしい媒体を、何とか最大限に生かすことを、試みたい。皆さんのご協力とご援助を一つよろしくお願いします(拍手)。(要旨)

野崎準備室長、
会の発足までの
経緯を説明

会長の挨拶に先立って、野崎茂創立準備室長から、全国の制作者たちに参加を呼びかけるに至った経過について、概要次のような説明があった。

「九十六年のはじめ頃、TBS オウム問題でテレビが世論の指弾を受け、『他メディアのバッシングと放送界の沈黙』という構図が繰り返されているときに、数人の有志が集まり、放送の現状が抱える根本的な問題について、語り合い発言していくべきではないかと話し合った。メディアの荒廃は、放送人自身の精神の荒廃、倫理の空白を招いている。放送界の先行世代は、この現状を自分の痛みとして捉え、自らを検証しつつ、今日の放送をめぐる文化状況に向かつて発言しなければならぬのではないか。また、われわれの放送についての経験や思いを、整理して次の世代に伝える義務もあるのではないか。そのために放送人の横断的な精神交流の場が欲しい、という趣旨だった。それは単に親睦の場であるだけではなく、放送という視座から

今日の文化状況に向けて発言する拠点であり、放送にながしか新しい価値を付与していく文化装置にしようというものだった。顔ぶれは、牛山純一、大山勝美、大蔵雄之助、平原日出夫、野崎茂、藤井潔、今野勉、村木良彦、吉村育夫など。

会の名称の原案は、放送人アカデミーだった。大衆文化の担い手である放送人と、そこから少し距離を置いた学問芸術の象徴アカデミー。二つの接点に位置する会という意味だった。

会の組織原則を、キーワードで表現してみようということになり、こちらの詰めは早く進んで、それが四超だった。あくまでももの作りの人たちを中心にというのが大前提だが、超組織、超地域、超世代、おまけに超現代。これで行くという事になった。仲間と呼びかけ、発起人(のちに世話人)が四十人あまり集まって、設立の気運は高まった。九十七年三月に第一回発起人会を開催。ここで会の名称についていろいろ異論が出た。アカデミーなんて照れくさい、というのだった。結局、『放送人の会』というきわめてまともな線が落ちついた。

九十七年初夏、川口幹夫氏に、『放送人の会』の初代会長をひきうけて頂けないかと、お願いした。川口氏は会の趣旨に賛同され、さらにご自身の抱負も持ちだされた。氏の華麗なる転身が実現し、今日の創立総会に至った。

会員が次々に発言

創立総会に先立っておこなわれたアンケート「放送人の会に望むこと」への会員の回答は、この日コピーされて参加者に配られたが、同じ趣旨で会場の会員十五人が一人一分半の時間で発言した。

市村元さん テレビ第一世代にずっと怒られながら仕事してきた。ここへ来てまた怒られるのでは、と（笑い）。先日も民放連の経営研究会で、デジタル化の影響でキー局も含めて、経常利益は途端に四分の一、五分の一になり、八十八年以降に出来たテレビ局は赤字に転ずるだろう、という話があった。いま現場はその種の話で怯えきっている。ともかくデジタル化は金が掛かるから、給料は半分にして、これまでの三倍働かなければいけないという。三倍働くのはいとわれないけれど、そういう経済の論理だけで三倍働きたくない。どういふものを作っていくのか、ということを引きちんと考えながら働きたい。そう思っている。会に参加した。

井上啓子さん マジメな話をしようと考えていたが、来てみて「とにかく若い人たちにたくさん参加してもらおうことが大事だな」と思った。若い人が、ここにいて一時代を画した先輩たちと話ができることは素晴らしいことだと思ふ。皆さんが一人ずつ若い人を連れてきて私の仲間をふやしてくれるようお願いしたい。

生方憲一さん NHKのアナウンサーの失敗例の一人です（笑い）が、そういう私から見ても、最近の放送の言葉については、こういう言葉でいいのかなあ、と感じることが多くなっている。時代が変われば言葉も変わって

当然だが、誰に向かって、何を話そうとしているのか。心はどこにあるのか、というようなことを若い人と一緒に考える場所ができればいいなと思う。放送の言葉はどう変わるべきなのか、そんなテーマを持って参加した。

加藤静夫さん ひところ一連の事件があつて心のなかで拳を振り上げたが、振り下ろす先がなくて困った。そういう折、お誘いがあつたので発起人会に出さしてもらつたが、技術系の人間が私一人なので緊張している。

石川一彦さん なんかもまた小うるさいのが出来そうだな、と思つているところへお誘いを受けて、びっくりした。私なんか資格があるのかどうか。うるさい人がいる中で、多少とも抑止力になればいいということであつた（笑い）。

大原麗子さん 放送人の会は、私にとって湿度計みたいなものではないか。ここに来て、居心地のいい世界を見つけてホッとしてしまつては私もおしまいだと思ふ。この方たちを見て私の湿度を測りながらお付き合いしたい。また、文壇の賞は、書き手自ら選考に当たつて侃々諤々の議論をしている。ここに集まつている人たちが自ら選考に当たつるような賞を設定したらどうか、と思ふ。選考の過程そのものがドキュメントだと思ふ。

金平茂紀さん ここにいる方々もテレビに対して危機感を持つておられるのだろうか、私も去年の事件で袋叩きにあつて、いかに今の放送メディアが総体としては弱体化して、自分たちの位置がわからなくなつて、痛感している。テレビは

化け物みたいに大きくて影響力が強ければいい、それに係わつて個人個人の固有な名詞とか顔が見えなくなつていくことに危機感を抱いている。真面目なことをいふつもりはなかつたのだが、皆さんのお話を聞いていて、あれっ、という気持ちになつたというのが正直なところだ。どういふ人がいるかではなく、何をやっていくか、人を引きつけられるような会であつて欲しい。

北村充史さん 私はNHKから制作会社クリエイティブ・ネクサスへ移り、さらには民間放送WOWOWで仕事をしているが、この三つ目の地点から眺めると、ここから先は放送ではなく情報産業そのものだと見える。ここが最後の放送局だろうと仲間とも話している。情報ではなく放送を、産業ではなく人から人へ、ということを目指したい。

佐藤利明さん カメラマンをやつていて。私の女房の番組批評の基準は、「わざとらしいかどうか」だ。わざとらしくないときは手を叩いてウケている。結婚してから、私が画面の裏側を説明してやつていくうちに、成長して（笑い）、ひねくれた見方もするようになった。テレビの視聴者にも成長してもらつて、うちの女房のように育つてもらわないといけない。映像というのはいかに面白くないか、といいつづけていないと、易きに流れる、と思ふ。

田原茂行さん 放送人には、かなり自由な放送人と不自由な放送人がいると思ふ。雑誌の連載で「井戸の外に集まろう」という文章を書いた。そこに「放送人の会」への期待をすべて書いたが、いろいろと制約ばかりで身動きできない不自由な放送人が、ふらふらと出てきて自由に議論できる場をなんとしても作つていただきたい。

長野克亮さん 大阪から来た。今は大学の教師をしている。放送には作家論というのがない。創作的な仕事については、批評というものがなく、ジャンルとして洗練されていかなければいけません。批評家の批評ではなく、内部の批評活動がほしい。事業計画のなかに先輩の作品の回顧展、シンポジウムがあるのはとてもいいと思ふ。

福田雅子さん 関西ラジオタリというよりもっと細かい身の回りのテーマを追いかけて仕事をしてきたが、そのなかで多様な価値観や考えの人々に触れてきた。いつか皆さんと一緒にリレー・メッセージみたいなものができたらいいな、と思つている。

三國章さん 大阪から、実は良からぬ魂胆で来た。某民間放送局でメディア・マインドという名前の社内研修を担当しているが、各界から講師を招いて話を聞いている。放送文化で今野さんや藤井さんなどの文章を読んでいて、あ、これはものになるなと思つてやつてきた。

村上絃一さん 二年前に映像から活字に移つて、いま「放送文化」を担当している。私の雑誌の仕事は、放送業界で働く人たちにいかにエールを送ることができると、ということだと思つている。皆が抱えている問題をどうやたら一緒に考えていくか、四月から誌面を一新すべく、いま盛んに企画をねつていて段階だ。ご協力をお願いしたい。

和田勉さん 僕はいいこととは三つしかない。遺産（太田胃散という

のもあるけれど）、番組、個人。これが出発点、基本だと思ふ。合言葉は三つだ。（時間はいま一分くらいでしょ？）何かやりたい、何かやりませんか、何かできることはありますか。これを是非みんなに問いかけたい。

「事務局」野崎茂、平原日出夫、藤井潔。千代田区放送会館の三階に事務局の部屋を開設、そこに週三日、洪水美奈子さんが詰めてくれることが紹介された。

「総務（兼広報）」・吉永春子、吉村育夫
「財務」久野浩平、村木良彦
「企画事業」今野勉、沢田隆治、野田宏一郎
「機関紙」大山勝美、齋明寺以玖子、堀川とんこう
「地域」磯野恭子、木村栄文

企画事業部から幹事会に対して、次のような事業計画の提案があり、実現に向かって各方面への働きかけなどの作業を始めることが決まつた。

一、「牛山純一、上坪隆、連続作品上映会&シンポジウム」
これについては、作品上映の許可の問題、スケジュール、会場、予算、放送文化基金への助成申請などが話し合われた。

二、「放送人の記録」の制作。
放送の歴史に残る仕事をした放送人たちの姿をインタビューの形で残そうというもの。全盛時代のラジオ番組制作者やテレビ第一世代がかな

り高齢になつたので、計画を急がなければならぬことが話し合われ、早急に、対象になる放送人のリストアップ、インタビューの決定、作品収集、資料集め、予算の策定、放送文化基金への協力要請などをする事になった。

幹事会に向けて、皆さんの情報、提案を
定例幹事会は、毎月第三水曜日に千代田放送会館内の事務局で行われています。会員各位は、おついでにときに自由に顔をお見せください。

幹事会は、「放送人の会」の今後の活動についての提案や、すでに動きはじめている活動を応用できるようなイベントの情報などを会員に求めています。社員研修会や地方のテレビ祭への参加など、いくつか具体的な話も検討のテーブルに乗っています。どうぞ、提案、情報など事務局にお寄せください。

「放送人の会」事務局
〒103-3221 東京都千代田区千代田3-2-1
TEL 03-3221-0019
FAX 03-3221-0019
月、水、木には、洪水美奈子さんが詰めてくれます。

会の充実のため、
会員勧誘のお願い
会の発言や活動を一層活性化させるために、若い世代の会員を充実させる必要があります。会員各位におかれましては、会の趣旨を理解して賛同される若い方に、入会をお勧めいたたくようお願いいたします。入会申込書は事務局にあります。電話かFAXでお申しつけください。

（機関紙担当）